

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2010 年 9 月 30 日

派遣者氏名（専門分野）	脇坂 真彩子 （日本語教育）
-------------	----------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	E タンデムのシステムの日本での応用の可能性
-------	------------------------

派遣期間

2010 年 6 月 17 日 ～ 2010 年 7 月 4 日

訪問研究機関	国	都市	訪問機関	受入研究者
	ドイツ	ハノーファー	Fachsprachenzentrum, Leibniz Universität Hannover	Dr. Klaus Schwienhorst

派遣先で実施した研究内容

現地で実施した研究内容を以下に箇条書きにする。

- ・ ハノーファー大学言語センター（Fachsprachenzentrum, Leibniz Universität Hannover）のシュヴィーンホルスト博士（Dr.Schwienhort）に会い、派遣者の修士論文について報告し、博士論文の構想について相談させていただいた。
- ・ シュヴィーンホルスト博士からタンデム学習に関する資料を紹介していただき、ハノーファー大学図書館で資料を収集、複写した。
- ・ 言語センターで開講されている語学の授業を見学した。
- ・ 言語センターの集会で、タンデムの実践研究をしているシュヴィーンホルスト博士とその同僚教師 7 名の前で派遣者の修士論文での研究と博士論文の展望について発表し、意見をいただく機会を得た。
- ・ 2010 年 10 月終わりより、言語センターの E タンデム・プロジェクトのコーディネーターであるシェルム氏（Ms. Monika Schelm）とミュアレム博士（Dr. Maria Muallem）と協力して E タンデム・プロジェクトを立ち上げる提案をしていただき、プロジェクトの実践にむけて 2 階のミーティングを行った。
- ・ ハノーファー大学言語センターで行われている日本語授業（初級、中級）にて現地で日本語学習をしている学習者の方に会い、E タンデム・プロジェクトについて紹介させていただいた。参加希望の学生は 20 名であった。

裏面に続く

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

派遣者は現地へ赴くにあたり、以下の3つを目的とした。1) ハノーファー大学の言語センターで実践されているEタンデム・プロジェクトについて学ぶ。2) 大学図書館にてタンデム学習に関連した資料を収集する。3) 派遣者の修士論文について報告し、博士課程での研究内容を深める。以下に、派遣者が現地で実施した研究内容と計画の達成状況、そして派遣者の研究活動における本派遣の成果について述べる。

第1に、ハノーファー大学で行われているEタンデムの実践について学ぶという目的について述べる。ハノーファー大学は2008年よりイタリアのサッサリー大学(University of Sassari)とEメールによる「Eタンデム・プロジェクト」(eTandem Projekt)の実践している。毎学期、イタリアから1名の研修生がハノーファー大学に滞在し、Eタンデム・プロジェクトのサポートを行っている。派遣者は現地にて、ハノーファー大学言語センターでEタンデム・プロジェクトの運営責任者である2人のコーディネーターとイタリア、サッサリー大学からの研修生から、これまでのEタンデム・プロジェクトの実践経験について話を聞かせていただいた。プロジェクトを行う上での、困難な点や、学生の傾向について知ることができた。

第2に、タンデム学習に関する資料収集について述べる。受け入れ教員であるシュヴィーンホルスト博士よりタンデム学習に関する資料を紹介していただき、ハノーファー大学に所蔵されている資料を収集、複写させていただいた。大学の図書館では、日本では手に入れることができないドイツ語で書かれた文献も多数入手することができた。これらの文献は現在、博士論文執筆の過程で非常に有益なものである。

第3に、派遣者の修士論文に関する報告について述べる。短い滞在期間ではあったが、シュヴィーンホルスト博士の計らいで言語センターの集会で修士論文での研究と博士論文の展望について発表し、意見をいただく機会を得ることができた。集会に参加していただいたのはタンデムの実践研究をしているシュヴィーンホルスト博士とその同僚教師7名であった。現地の先生方は派遣者が日本の大学キャンパスで行ったタンデム学習プログラムの実践研究に興味を持ってくださった。派遣者の修士論文の研究は日本の大学キャンパスで行った自主参加型のタンデム学習プログラムの参加者のケース・スタディを通して、彼らがタンデム・パートナーとどのように学習を進め、なぜタンデム学習が続いていたのかを明らかにしたものであった。ハノーファー大学のEタンデム・プロジェクトでの一番の問題点は学生の動機が持続しないという点であったが派遣者が収集したデータからはそのような例は見られず、その点に関心が集まった。また、発表後の質疑応答では日本での学習環境とドイツでの学習環境の違いについて興味深い意見交換ができた。さらに、この話し合いを通して上に述べたペアリングの問題解決法として、ハノーファー大学とEタンデム・プロジェクトを始めてはどうかという話をいただいた。派遣者が現地に滞在した期間は2週間と非常に短かったが、シュヴィーンホルスト博士と現地のEタンデム・プロジェクトのコーディネーターであるシェルム氏(Ms. Monika Schelm)、ミュアレム博士(Dr. Maria Muallem)と2回のミーティングを行い、日本語とドイツ語のEタンデム・プロジェクトについて具体的に話し合った。また、シュヴィーンホルスト博士の計らいにより、現地の日本語の先生ともコンタクトを取ることができ、現地で行われている日本語コースにてEタンデム・プログラムの参加希望者を募ることができた。Eタンデム・プロジェクトは日本語コースに参加している学生から高い関心を集め、その結果20名もの参加希望者を得ることができた。

2週間という短い期間の中では十分にプロジェクトの相談をすることはできなかったと言わざるを得ないが、10月終わってからハノーファーと大阪でEタンデム・プロジェクトを実行するために帰国後もインターネットを介して連絡を取り合い、帰国の約4ヶ月後からEタンデム・プロジェクトが始動することとなった。

派遣者が現在執筆中の博士論文はEタンデム・プロジェクトに参加したドイツ語と日本語のデータを収集し、Eタンデムにおける動機づけ維持のメカニズムを解明しようと試みるものである。従来、動機づけは固定し不変のものであると捉えられ、プロジェクトなどが終了した後にアンケート調査を実施するという方法で学習者の動機づけの調査が行われてきたが、近年動機づけは時間とともに変化する動的なものとして捉えられるようになってきている。そこで、派遣者は動機づけを時間とともに変化する動的なものとして捉え、質的なケース・スタディーによってEタンデム・プロジェクトでの動機づけ維持のメカニズムを明らかにしたいと考えている。調査にあたっては学習活動のデータだけではなく、プロジェクトが進行する過程での派遣者とのやり取りや、学習終了後のインタビュー、活動に使用したデータなど様々な視点から、包括的にEタンデム・プロジェクトの参加者の動機づけを分析することとした。このため、翌年の2011年度に大阪大学「学生海外短期研究留学助成」制度による助成を受け、再びハノーファー大学へ赴きEタンデム・プロジェクトの参加者へのインタビューなどの調査を行

った。

本プログラムで派遣していただいたことは、派遣者の博士論文の研究の初段階として重要な意味があった。タイトルに示した「E タンデムのシステムの日本での応用の可能性」を実践研究していく準備を整える事ができたことは、派遣者が本プログラムに参加させていただいたことで得られた大きな成果である。

派遣後の研究発表の予定

未定（2010 年 9 月 30 日現在）。E タンデム・プロジェクトは 2010 年 10 月末より始まる予定であり、まだ始まっていないため、具体的な学会発表は未定であるが、今後実践研究の成果を国際学会で発表する予定である。